
日本におけるエミール・ヴェルハーレン

—— 受容史のための基礎作業的序説 ——

大 場 恒 明

はじめに

ベルギー詩人エミール・ヴェルハーレンは、明治30年代に上田敏によって紹介されて以来、明治、大正、昭和を通じ、この詩人の多面性が、時代の変動に呼応し、その都度、日本の詩人たちの詩魂をさまざまに共振させ、日本近代詩の成立と進展に深くかかわった。

表1に明らかなように、ヴェルハーレンの主要詩集のうち、10名を超える訳者により、完訳5詩集をふくみ大部分の詩集が紹介された。

それに反し、その影響の実態の学術的な解明が十分になされているとはいえず、通時的な受容史もいまだに書かれていないことは、表3に見るとおりである。

この小論において、基礎作業として、関連文献を時系列で一覧し、日本におけるヴェルハーレンの比較文学研究にむけて、問題提起を試みながら、なにがしかの寄与をしたい。

1 「人間」という新しい「神」を発見した詩人

ヴェルハーレンは終生フランドルの大地に根ざした詩人であった。フランドルの豊饒な現実世界と神秘的な精神世界の二元的なベクトルが、この詩人に雄渾な律動を与えている。

(表1) Émile Verhaeren (1855 - 1916) の主要詩集

(邦訳詩篇数のカッコ内は、複数訳者による同一詩篇訳を加えた総数を示す)

出版年	主要詩集	(略記)	邦訳詩集名	詩篇数	邦訳詩篇数
1883	<i>Les Flamandes</i>	(Fl.)	『フランドル景物詩』	27	4(5)
1886	<i>Les Moines</i>	(M.)	『修道士たち』	32	5
1888	<i>Les Soirs</i>	(S.)	『夜』	24	1(2)
1888	<i>Les Débâcles</i>		『崩壊』	19	0
1891	<i>Les Flambeaux noirs</i>		『黒い炬火』	12	0
1891	<i>Les Apparus dans mes Chemins</i>	(Ap.)	『わが途上に現れしもの』	13	2
1893	<i>Les Campagnes hallucinées</i>	(C.H.)	『幻覚にとらわれた田園』	18	18(24)
1895	<i>Les Villages illusoires</i>	(V.I.)	『幻想の村々』	15	3(4)
1895	<i>Les Villes tentaculaires</i>	(V.T.)	『触手ある都市』	20	20(21)
1895	<i>Les Bords de la Route</i>	(B.R.)	『路傍』	30	5(7)
1895	<i>Les douze Mois</i>	(D.M.)	『十二ヶ月』	12	6(10)
1896	<i>Les Heures claires</i>	(H.C.)	『明るい時』	30	30(38)
1899	<i>Les Visages de la Vie</i>	(V.V.)	『生活の相貌』	14	6(9)
1902	<i>Les Forces tumultueuses</i>	(F.T.)	『騒擾の力』	33	5(6)
1904	<i>Toute la Flandre. Les Tendresses premières</i>		『全フランドル 初めての愛撫』	15	0
1905	<i>Les Heures d'Après-midi</i>	(H.A.)	『午後の時』	30	30(45)
1906	<i>La multiple Splendeur</i>	(M.S.)	『無量の壮麗』	22	11(16)
1907	<i>Toute la Flandre. La Guirlande des Dunes</i>		『全フランドル 砂丘の花飾』	29	0
1908	<i>Toute la Flandre. Les Héros</i>		『全フランドル 英雄たち』	16	0
1910	<i>Toute la Flandre. Les Villes à Pignons</i>		『全フランドル 切妻のある町々』	34	0
1910	<i>Les Rythmes souverains</i>	(R.S.)	『至上律』	15	3(5)
1911	<i>Toute la Flandre. Les Plaines</i>	(Pl.)	『全フランドル 平原』	67	2
1911	<i>Les Heures du Soir</i>	(H.S.)	『夕べの時』	26	6(7)
1912	<i>Les Blés mouvants</i>	(B.M.)	『そよぐ麦』	39	20(22)
1916	<i>Les Ailes de la Guerre</i>	(A.G.)	『戦争の赤い翼』	34	4
1917	<i>Les Flammes hautes</i>	(F.H.)	『天上の炎』	25	25(32)

処女詩集『フランドル景物詩』(1883)でブリュージュ的農民のむせ返るような肉体性を赤裸々に詠い、『僧院の人々』(1886)では一転してカトリシズムの霊界に沈潜した。この対極的な振幅のなかで世紀末的懷疑と煩悶に陥った彼が、『夜』(1887),『崩壊』(1888),『黒い炬火』(1890)の「黒の3部作」で、危機的なデカダンスを彷徨し、頽廢が生む幻想を表現する詩法を象徴詩にもとめ、マラルメに私淑した。

『わが途上に現れしもの』(1891)は、生涯の同伴者となる女性マルト・マッサンとの出会いによってニヒリズムから救済された詩人の外界回帰の甦生を示す詩集であった。マルトとの愛の時間を詠い続けた3部作『明るい時』(1896),『午後の時』(1905),『夕べの時』(1911)は、ヴェルハーレンの人間賛歌と宇宙的に放散する情動の源泉である。

内面的虚無から脱出した彼の視野は、人間存在と生命の環境にむかって開いていく。社会主義3部作と呼ばれる『幻覚にとらわれた田園』(1893),『幻想の村々』(1895),『触手ある都市』(1895)では、農村の生き血を吸う都市の侵食をうけ荒廢する田園が、幻想的な奇怪なイメージで描かれ、都市の近代機械文明と資本主義の怪物的な残酷性が告発される。これらの詩集に至ってヴェルハーレンは、伝統的なアレクサンドランを主体とする定型詩から離脱し、自由詩の新しいリズムの創出をめざしている。ヴェルハーレンは思想的には社会主義に傾くが、政治的・綱領的であるよりは理想主義的自由主義に彼の本領があって、詩法的には、象徴詩人たちの間から澎湃として簇出した自由詩の運動に与することになったのも必然の帰結であった。フランドル大地に詩魂を汲むヴェルハーレンの同情は疲弊する農村にあるが、しかし同時に、近代都市文明の燃え立つエネルギーに未来への希望を見出そうとしている。フランドルのきびしい自然力のなかにも人間の崇高な力と共振するリズムを発見する。

『触手ある都市』によってヴェルハーレンはフランス詩人たちの間に認知され、さらに、『生活の相貌』(1899),『騒擾の力』(1902),『無量の壮麗』(1906),

『至上律』(1910)と、人間肯定の解放哲学へと詩的世界を遠心的に拡大していき、グローバルな名声とともに、独自のヴェルハーレン的詩想と律動が確立した。『生活の相貌』では、矮小な利己主義を超越して、あらゆるもののなかに生きる単純にして永遠の法則にもとづく自然の生命と人間の運命の始原的な融合を実感し、宇宙的構想に通ずる万物一如の境地を拓いている。『騷擾の力』は、汎ヨーロッパ的視点から欧州人にむけた「あなたがたの運命の意志が人類の意志となるように」という呼びかけであり、善悪を超えた人間努力の肯定と未来への信仰告白である。『無量の壮麗』のキイは「賛嘆」であり、融合する万象と人間の不思議な生命に驚嘆し、人類の文化の歴史に賛嘆する。全詩篇が万物肯定であり生の大歓喜であり人間賛歌である。また、自然詩人としてのヴェルハーレンの類まれな資質が開花した詩集で、自分の生命と照応する自然の生命に素朴に感嘆する。『至上律』は前詩集からの延長として、人間精神の崇高さを称える詩篇から成るが、詩法としては、荘重なアレクサンドランを主体にした伝統的な定型詩へ回帰する傾向をうかがわせている。

人類の未来を託したヨーロッパ人の間で、しかもツヴァイクなどの親しい友のいるドイツとの間で大战が勃発したことは、ヴェルハーレン的世界が否定されるに等しいことであった。『戦争の赤い翼』(1916)によって戦争の惨禍を直視し、ドイツ軍に蹂躪された祖国ベルギーの救援のため、各地での講演に著述に従事するさなか、1916年11月、ルウアン市での講演を終えパリに帰る途中、列車の車輪にふれ事故死した。61歳であった。死後出版となった『天上の炎』(1917)では、人類への信頼を喪失させる危機に断固として抗するかのよう、未来へのゆるがぬ信仰、自然とともに人間の近代生活の賛美を詠いあげ、それまでのヴェルハーレン世界の綜合を示している。神なき世界に人間という新しい信仰の対象をうち樹て、世紀末的ニヒリズムを超越したヴェルハーレンは、アンドレ・ジッドの『地の糧』(1897)、「アベイ派」のユナミスムなどとともに19世紀末から20世紀初頭に興った人間回復思想のもっとも熱烈な唱道者であった。

2 日本との最初の接触

ヴェルハーレンの名前が初出した日本の文献は、明治30年の「江湖文学」1月号の無署名記事（筆者は上田敏か）「瀛西芸録」（表3，資料番号I⁽¹⁾）と思われる。

ただ、長谷川武次郎という出版業者がヴェルハーレンの原詩5篇を賛として付した日本風物の錦絵ふう画集*Images Japonaises*（表1，1）を出版したのは、奥付の発行日付によれば明治29年5月7日であるから、この日付を額面通り受け取れば、ヴェルハーレンと日本との最初の出会いは明治29年である、ということになるが、この発行日付には問題がある（LXV）。長谷川武次郎の出版物について詳細な研究を行ったFrederic A. Sharf⁽²⁾によれば、長谷川が1900年のパリ万博への出品を企画してヴェルハーレンに画集を送り原詩の賛を依頼した、ということであるが、Sharfはその根拠となる十分な資料を明らかにしていない。ヴェルハーレンの網羅的なビブリオグラフィの著者Jean-Marie Culot⁽³⁾が、*Images Japonaises*の発行年を1900年としているのは、パリ万博出品をもってこの書物の発行年としているためと思われる。*Images Japonaises*と大筋で同一絵柄だが異なるキャプションの書物が他に2種類あり、*The Smiling Book*と*Glimpses of Japan*がそれだが、これらの奥付の発行年は、同じく明治29年であり、何度も再版された*Images Japonaises*の奥付の発行年月日もまったく同一なのである。このことが、*Images Japonaises*の真の初版発行年について、奥付の記載にもかかわらず疑問視させ、発行年を明治33年（1900，パリ万博）とすべきではないかと思わせるのであるが、それを確証するための基礎作業がまだ残されている。

さらに、長谷川武次郎とヴェルハーレンの接触が実現した経緯についてもかならずしも明確でない。イギリスの文芸誌ADAMの編集主幹による巻頭論文のなかで、英国人Osman Edwardsがヴェルハーレンに勧めて、長谷川に詩篇を送らせた、と記載されているが、それを証明するような言及はなされていない。オスマン・エドワーズは、イギリスにおけるヴェルハーレン

のもっとも早い紹介者で、1895年4月Daily Chronicleと、1897年11月アーサー・シモンズが主宰する文芸誌The Savoyにヴェルハーレン論⁽⁵⁾を発表し、のちに1915年、ヴェルハーレンの劇作品『僧院』を*The Cloister*と題して英訳するなど、1894年以来ヴェルハーレンと親交があり、また、当時、東京には、B.H.Chamberlainや、明治29（1896）年以来東京帝国大学講師になっていた小泉八雲（Lafcadio Hearn）など、ヨーロッパの文学界の情報をたえず受信している知識人たちがいた。彼らは日本の代表的なお伽噺を各国語に翻訳し、長谷川武次郎の絵入り縮緬本の出版事業に協力していた（LXVIII）。長谷川は*Images Japonaises*のパリ万博出品を企画し、チェンバレンなどを通じ、オスマン・エドワーズからヴェルハーレンへと、詩篇の執筆を依頼したのではなかろうか。エドワーズは明治31（1898）年来日し、各地を訪れ伝統演劇を調査しながら半年滞日し帰国後、成果を出版しているし、滞日中はチェンバレン、ハーンと交流し、特にハーンとは親交を結び帰国後ヴェルハーレン詩集を贈っているほどである。長谷川武次郎とも接触し、3点の自作の出版をゆだねている。このような事情から推して、*Images Japonaises*の出版については、オスマン・エドワーズの仲介の可能性が高いと思われるが、この辺の経緯についても、なお調査の必要がある。

与謝野寛は、生前のヴェルハーレンを訪問した唯一の日本文人で、1912年に実現した面談のさい、ヴェルハーレンが*Images Japonaises*に言及したのに、寛はその存在を知らず無然とした様子が会見記に記録されているが（XI）、この長谷川本はもっぱら外国人観光客や一部好事家むけに出版されたもので、文学界とは別な範囲で流通したので、ヴェルハーレンの5篇の原詩が注目されることはなかったし、この文献の資料的価値はおのずから限られたものとどまる。

3 上田敏の功績

ヴェルハーレンを最初に日本文学界に紹介した功績者はおそらく上田敏で

あり、その文献は前述の「瀛西芸録」であると思われるが、上田敏は、フランス語については第2外国語としての素養はそなえていたものの、彼がフランス語圏の近代文学についての知識を得ていたのは、主として英語文献を通してであった。19世紀末、明治30年代はイギリス文学者たちの間でヴェルハーレンが注目されはじめていた時期であり、上田敏は、ハーンなど東京帝国大学の講師たちからも、英文芸誌などからも、ヴェルハーレンに関する情報を得ていただろう。

「瀛西芸録」も、Virginia M. Crawfordが1896年11月、The Fortnightly Reviewに発表したÉmile Verhaeren : the Belgian Poetの内容を祖述したものである。⁽⁷⁾この論文のなかで、ヴェルハーレンの生まれから、詩人としての資質まで簡潔に紹介し、処女詩集、第2詩集、黒の3部作、社会主義3部作など、既刊の主要詩集について、その詩的変遷の意味をたどり、きわめて適切な解説を行い、ヴェルハーレンの特異な語法にもふれ、「氏の筆を操り紙に臨むや機の離合、神の去来にまかして奇懷をやるを以て、(中略)新語を編み(中略)破格の文章を作る」と指摘するなど、この最初の論文ですでにヴェルハーレンの詩的資質と閱歴が見事に鳥瞰されている(LXVI)。

上田敏は、明治34年、ヴェルハーレンの詩論を「悲哀」「仏蘭西の哀観詩人」の題に2分して翻訳した(2,3)。この論文は、ラマルティヌなど浪漫派からルコント・ド・リールなど高踏派、ボードレー、ヴェルレーヌまで19世紀フランス近代詩のなかに「悲哀」の表象を探り分析したもので、フランス近代詩関連の文献がきわめて少なかった当時、上田敏が、まもなく『海潮音』のなかにフランス詩を翻訳するにあたって、この論文からフランス近代詩への展望を得ていたことは、ヴェルハーレンのこの詩論の1部を『海潮音』のなかに収録していることから明らかである。とくに、トリスタン・コルビエールとジュール・ラフォルクを日本に紹介した最初の文献であろうと思われるが、2人について、「大胆な詩律の革新」と「凄蒼の滑稽」を「フランス詩文に輸入した」詩人として正鵠を射た評価を下すなど、この論文の

資料的価値はきわめて高い (LXVI)。

ところがこの詩論の原典がいまだに不明なのである。日本近代詩史において重要な位置を占める資料なのに、原典のタイトルも、収録出版物名も刊行年も分からないというのはかなり異例なことである。

原典探しは、①1887年から1900年までに発表されたヴェルハーレンの論文で、②この期間中にイギリスで刊行されている雑誌・新聞など、に掲載されているのではないかと、という作業仮説にもとづいて行われた。①の根拠は、論文中にジュール・ラフォルグを「既に没せし人」としているが、この詩人の没年は1887年で、上田敏の翻訳が掲載されたのが1901年5月だからである。②については、当時上田敏が情報源としていたのは主として英雑誌・新聞だったからである。前述のキュロのビブリオグラフィはヴェルハーレンが寄稿した英雑誌・新聞についての追跡を行っているが、そこには見当たらないし、筆者自身も当該期間の英雑誌の調査をしたが成果はなかった。定期刊行物だけではなく書籍も、さらにフランス語文献にも範囲を広げる必要があるかもしれないが、あまり期待はできない。なぜなら書籍やフランス語文献に収録された論文なら、今までその存在が発見されずにいることは考えにくいからである。とすると、もうひとつ考えられるのは、上田敏が生原稿を入手してそれを直接翻訳したのではないかと、いう可能性である。前述した*Images Japonaises*の成立に手を貸したかもしれないオスマン・エドワーズとヴェルハーレンとの親交、エドワーズ来日の折のチェンバレンやハーンなど上田敏の近くにいた人たちとの交流などの人間関係を考えると、この可能性も無視できないのではないかと思われる。しかし、いずれにせよ、この原典探しという基礎作業は依然として残っている。

上田敏の功績は、明治20年代から30年代にかけて新しいリズムと形式をもとめてなされた新体詩論議に対する一つの強力な方向性の提示としてフランス近代詩を移入したことであり、ヴェルハーレン受容史においては、初めてその詩篇を邦訳し紹介したことである (4, 5, 6, 7, 8, 9)。

明治37年1月「明星」に、宗教的教訓を内包する寓話を意味するParaboleというヴェルハーレン詩篇を「鷺の歌」と題して、しかもタイトルの脇に「象徴詩」と付記して訳した。この詩が収録されている詩集*Les Bords de la Route*『路傍』（1895）では黒の3部作時代の内面的苦悶をすでに克服し、彼の詩的ベクトルは外へと転じていた。フランス詩界では80年代末から90年代にかけて「象徴詩」が大きいうねりとして席捲していた時代で、ヴェルハーレンはマラルメに私淑して象徴詩の詩法に学びつつ彼の詩的世界を構築し詩人としての地歩を固め、象徴詩人の一人に数えられるに至っていた。とはいえ、ヴェルハーレンには生地フランドルに根付いた雄渾な詩想を底流とし、閱歴に伴ってさまざまに変貌するきわめて多様な詩的特性があり、「象徴詩人」という単一な分類に収まりきる詩人ではない。『路傍』はフランドルの自然と生活のなかで、卑近な外界事象と五感との交感を通じ、幻想的あるいは比喩的な形象をもって微妙な想念を詠ったヴェルハーレン的な象徴詩ではあるが、詩篇Paraboleは、自然の生命力の奥深さと本質を、捉えそこなう人間の認識力の限界性をアレゴリイによって詠った文字通り比喩詩であって、少なくともマラルメ的な意味における象徴詩ではない。むしろ、外界に背をむけて言葉の錬金術の秘儀にふけっている「象徴詩人」たちを揶揄した詩篇ではないかと思われる。

「鷺の歌」を含めヴェルハーレンの6詩篇を明治38年『海潮音』に収録し、上田敏は、「鷺の歌」の末尾に「ボドレエルにほのめきヴェルレエヌに現はれたる詩風はここに至りて、終に象徴詩の新体を成したり」と注記して、処女詩集『フランドル景物詩』の詩篇「水かひば」まで「象徴詩」のなかに括り込み、ヴェルハーレンをフランス象徴詩の筆頭詩人として印象づけたのは、まだフランス象徴詩を鳥瞰的視点から受容するほど情報が十分でなかったための視野狭窄的錯誤というほかはない。フランス象徴詩自体が明確に定義づけしがたい範囲の広さをもっているが、象徴詩という範疇のなかでの比率からすれば上田敏がヴェルハーレンに与えた比重が大きすぎ、やがて盛ん

になる象徴詩論議に混乱を生じさせる一因ともなった。

そのうえ、名訳の誉れ高い上田敏訳は訳詩の定律的リズム、訳語の彫琢の造型美、凜然たる格調の高さゆえ、象徴詩の捉えがたく揺蕩い、幽玄で不協和的な情調象徴を訳出するには、みずから告白しているように、彼自身の高踏派的資質が妨げとなったと言えよう。『海潮音』の刊行直後、明治39年1月、おひざもとの「帝国文学」誌上に「訳者はフランスのさかんな奔放な作をあまりに品よくしてしまった弊がありはしないか。(中略) そのおもな原因は、西洋の近世の詩を訳すのに、日本の古い語を用いすぎたからではあるまいか」という批判が出るほどであった。

蒲原有明、薄田泣菫、三木露風などは、フランス象徴詩からの直接的受容というよりは、『海潮音』ぶりを受け継ぎながら独特の日本象徴詩を拓いた。

上田敏の功罪が指摘される所以であるが、しかし、上田敏は、すでに明治31年7月「帝国文学」に「仏蘭西詩壇の新声」を書き、フランス象徴詩を高踏派への革新として近代フランス詩史的位置づけを明確にし、象徴派の運動としての自由詩にふれ、サムボリストはヴェル・リブリスト（自由詩派）であると規定するなど、以後、『海潮音』の序文はじめ、数多い論評を通じてフランス象徴詩の実態の紹介に精力的に取り組んだ上田敏の功績は、他の追随をゆるさないところである。『海潮音』以後、内藤濯や折竹蓼峯など「帝国文学」同人が、上田敏とともにヴェルハーレンの紹介につくした功績も大きい（10～14, III, V）。

情報が多くなってくるにつれて、明治43年ごろをさかいに、幽玄な世界を詠う象徴詩人から、宇宙的に拡大する人間の限らない力を讃える生の詩人という新しいヴェルハーレン像への転換が行われる。このヴェルハーレン像転換の口火をきったのも上田敏であった。明治43、44年に翻訳された詩篇「俊傑」「世界」「都会」「思想」「不可能」（15, 17～20）は詩集『無量の壮麗』『幻覚にとらわれた田園』『騷擾の力』のなかの詩篇で、ヴェルハーレンが世紀末的なデカダンスからの転向後の宇宙的構想をもっともよく示す雄大な長

詩である。こうした背景には、明治43年4月創刊の「白樺」が主導的役割を果たすことになる自我肯定、人間賛歌の思潮への時代的推移があり、明治20年代から日本に紹介されていて「白樺」創刊前後からとくに盛んな論議を呼ぶホイットマンへの関心の高まりと共通の方向性をもってヴェルハーレンの再評価が行われることになった。

4 自由詩論議と川路柳虹

明治30年代末期に至って自然主義隆盛の気運とともに、従前から永年にわたり新しいリズムと形式を求めてきた新体詩論議のなかから、「口語自由詩」への待望が生じてきた。口火をきったのは明治39年6月「文章世界」での島村抱月の「言文一致と将来の詩」と題する談話、翌年11月「詩人」誌上の「現代の詩」であろう。抱月は、詩歌が「真直に實際生活に接して」いなければならないこと、形式においても思想においても現実の生活に切実に触れ真に表現する詩であるためには、小説などの散文と同じく口語体で書かれた、言文一致体の詩でなければならないと説いた。

「明星」中心の浪漫主義、象徴主義、抬頭する自然主義が同時並立していた明治30年代末期、このなかで、フランス象徴詩の自由詩運動と、日本的な自然主義思潮とが接点をむすぶ方向性をもったというのは、まことに特異な日本的状況であった。口語自由詩の提唱は、粉飾を剥いだ現実をストレートに活写することをめざす自然主義の理念と軌を一にするものであった。古語を頻用し難解晦渋な雅語美文に堕して一般大衆との乖離をきたしていた「海潮音ぶり」とでもいうべき象徴詩も、時代感覚からずれた浪漫的感傷詩も、七五、五七を基調とする伝統的律動と詩形から脱することができないでいる当時の詩壇に対してあがった革新ののろしが口語自由詩運動であった。抱月の「言文一致詩」の主張が、フランス自由詩の場合と同じく、伝統的定型詩形からの解放指向と結びついて口語自由詩の運動になったのであるが、フランスにおいては、自由詩は象徴詩のひとつの表現形式として成立しているの

に対して、日本における自由詩の唱道は、少なくとも発祥期には「自然主義詩」の運動だったというのが日本的な特殊事情なのである。

川路柳虹が明治40年9月「詩人」誌上に発表した「塵溜」（のちに「塵塚」と改題）が、日本最初の口語自由詩の創作だとされている。川路柳虹は口語自由詩のもっとも先導的な実作者であったが、それ以上に、フランス詩や口語自由詩に関する研究家であり理論家であった。フランス語のvers libreを訳して「自由詩」と最初に命名したのも彼であった。

フランスにおける自由詩も象徴詩がそうであるように当然、個人差が激しく、ジュール・ラフォルグ、ギュスタヴ・カーン、ヴィエレ＝グリファン、モレアス、アンリ・ド・レニエ、ヴェルハーレンなどが、それぞれの詩的特性にもとづいて、それぞれ独自の自由詩を創出している。詩法研究家のアンリ・モリエはヴェルハーレンの自由詩について、息遣いと感動の波動が、韻律となって表出し、多用される畳韻法（allitération）と感情の起伏に従って移動しストレスがかかる強さアクセントが強靱なりズムを鍛えあげ、音量豊かな効果が結晶する、と分析している。⁽⁸⁾

川路柳虹はフランス語文献に直接あたり情報収集できた少数の明治期文人のひとりで、ヴェルハーレンの移入にも功績があった。口語自由詩の新律格を学究的に追求し続けた川路は、ヴェルハーレンの自由詩から学ぼうとその特質を分析した。大正6年4月「文章世界」の「ヴェルハアレン論」において、今日の自由詩を創成したヴェルハーレンの詩の技巧は無雑作、無拘束で、詩句は無韻な調律の上に置かれていても、詩的リズムが湧出している。詩句を鉄砧のうえで鍛錬するような努力を重ねたすえに、無作為で自由に見える律動を得たのだと、口語自由詩にも詩法の必須であることを言外に主張する。ヴェルハーレン特有の詩法は、滾々と湧き出る思想を次々に畳みかける重韻法や連鎖する頭韻が不思議な音調の快感を生み出し、詩篇は、一見自由奔放な律調にまかせながら、驚くべき緻密な統合を得ていると川路はヴェルハーレンの自由詩の特質を論じている（XXIII）。大正8年5月「現代詩歌」の

「ホイットマンと自由詩」で、川路は、ヴェルハーレンがホイットマンふうの重韻法、頭韻法を取り入れホイットマンを継承しながら、それを有機的に、すなわち、より「詩的」にしてホイットマン詩の散文体から脱却してオリジナルな自由詩を創出した、と米仏の類似的な両詩人の関係とそれぞれの独自性を指摘している（XXVIII, XLV）。

川路柳虹は大正5年11月、みずから主宰する詩誌「伴奏」を創刊し、大正6年11月まで5輯刊行した。ヴェルハーレン詩篇の翻訳、論評などを掲載したほか、詩人たちと自分の創作発表の場であったこの詩誌が、大正期の口語自由詩史上に占める位置は大きい（45, 46, XVI, XVII, XXIV, XXV）。

川路柳虹という詩人・研究家が精力的に追究した仕事は日本近代詩史においてきわめて重要なものであったのに、川路柳虹研究がまだ十分なされていない。ヴェルハーレン受容史における川路の功績も、綿密な資料分析を通じて明らかにしなければならない。

5 正統的象徴詩人 三富朽葉

「正統的」と称したのは、多かれ少なかれ『海潮音』の影のなかにいて定律的詩法の流れから離れない前期象徴詩人たちとは異なり、暁星校出身の三富朽葉は、フランス語文献を介しフランス象徴詩に直接学び強い影響を受けた詩人だからである。27歳にして夭折したため、「一つの体系が出来かか⁽⁹⁾てゐた」といわれる彼の詩人としての大成が実現しなかったが、残された詩作品は、学術的研究の裏づけと一体化した高い文学性を示している。

明治44年早稲田大学を卒業するが、在学中から近代フランス詩人を耽読し象徴主義に親熟した。また、在学中（明治42年）に結成した「自由詩社」に拠り、口語自由詩運動を展開していた。三富はAndré Beaunierの論文⁽¹⁰⁾*Le Vers libre*からフランス象徴主義の自由詩の詩法を学び、それを視野にいれ創作活動を行った。

三富はヴェルハーレンの詳細な評伝を大正4年4月、5月、大正6年2月、

それぞれ「早稲田文学」に発表した (XIII, XV, XVIII)。各種のフランス語文献を参照したうえでの多面的なヴェルハーレン像を描いていて、内容・分量ともに、スケールの大きさ、論点の深さ、範囲の広さ、いずれをとっても、日本におけるヴェルハーレン評伝としてはもっともすぐれた資料である。

三富らの口語自由詩運動は「57, 75, 86, 55 などの定型から解放された自由な表現詩形、言葉の数が生む調べよりも、思想や感情の流れや、官能や感覚の息吹のかなでる調べをそのまま表現出来る詩形を創り出そう⁽¹¹⁾」という明確な綱領のもと展開され、詩境と詩形の解放運動としての口語自由詩の追究がようやく軌道にのった。

三富はヴェルハーレンを「動いて止まぬ活力」の詩人と評し、「彼の韻律は、常に動揺し常に感激する彼の生活から迸り出る大息である、渾身の生動である、全部の漲溢である。緊張の苦痛と漲溢の逸楽とに、彼の言葉は猛るが如く狂ふが如く躍ってゐる」(XIII)と特質を捉えている。三富は、大正三年には、「私はVerhaerenの羅列的な感情文明を愛さぬ。おお鮮明な音楽 (Kahn)、繊細な現実 (Rimbaud)⁽¹²⁾！」と書き、ヴェルハーレン後期の宇宙交感的大詩集の、まるで万物豊饒のエネルギーが七花八裂して乱舞するような無限空間、轟々と重畳する動力律などに生理的・体質的な違和感を表明している。三富の詩的感受性は、交響楽的な昂揚よりは独奏曲や室内楽の叙情性とこそ共振するものだからである。しかし、1年後、ヴェルハーレンの愛の詩集を発見し「私のと同じ意味の賞嘆の境地が信念を以って歌ってあります⁽¹³⁾」と書き、「告白、感謝、祈祷、真摯な愛、裸形の喜び、鮮かな智慧、爽かな黙識のあらゆる優しさが輝いてゐる。(中略) さながら樂園の眺めである⁽¹⁴⁾」とヴェルハーレンの叙情詩人としての本質に共感し、この時期、生活をともにしていた高木芝露子へのみずからの心情と重ねて受容している。

三富がヴェルハーレンに傾倒していく大正4年頃には、彼の創作活動は口語自由詩から散文詩に移っていた。散文詩「微笑についての反省」におけるヴェルハーレンの愛の詩集の反映を確認し、ヴェルハーレンと三富の間の詩

的接点を明確にさせることが今後の課題となる (LX, LXX)。

6 与謝野寛の訳業

与謝野寛は明治41年の「明星」廃刊の痛手をいやすべく、明治44年11月渡欧した。寛は晶子とともにロダンを訪問し、晶子の帰国後、当時パリ郊外のサン・クルーに住んでいたヴェルハーレンと面談する機会を得た。日本の文人でヴェルハーレンと会見したのは与謝野寛だけであろうし、寛・晶子共著『巴里より』(XI)に記録されたヴェルハーレンの書斎の様子と会談内容はきわめて貴重な資料である。

パリ滞在中、寛はフランス語の勉強のつもりで、現代詩人の詩を中心に翻訳し、帰国後大正3年、訳詩集『リラの花』を出版した。ヴェルハーレンの詩篇については、当時刊行されたばかりの詩集『そよぐ麦』(1912)から18詩篇が翻訳され、そのうち5詩篇が大正2年4月「帝国文学」に掲載された(22~39)。

この詩集は、ヴェルハーレンの手なれたテーマであるフランドルの大地と農民を詠ったもので、すでに独自の自由詩を完成の域まで鍛えあげたヴェルハーレンはこの詩集でも自由な律動を駆使しているものの、8音綴や12音綴の韻律を主体とした詩篇もあり、晩年のヴェルハーレン詩が定型化へ回帰する方向をうかがわせていることが見てとれる。

与謝野訳は、誤訳もあるが、大らかで大胆な訳法であり、ヴェルハーレン詩篇の息遣いと共振しているような、雄渾なリズムの口語自由詩となっている。この訳業は、「明星」時代の弟子でもある高村光太郎のすぐれたヴェルハーレン詩の翻訳に引き継がれていくものである (LXIX)。

7 民衆詩とヴェルハーレン

大正期の詩史においてもっとも注目すべき詩的活動は、「民衆詩派」といわれる詩人たちの運動である。白鳥省吾、百田宗治、佐藤惣之助、尾崎喜八、

千家元麿、富田碎花などを中心とし、大正期最大の詩人集団「詩話会」が新潮社から発行していた「日本詩人」に拠って活動した。尾崎喜八や千家元麿のように「白樺」に属する寄稿者もいた。

第一次世界大戦後、世界的に澎湃として起こったデモクラシーのうねりのなかで、日本では吉野作造の民本主義を思想的背景とし、大正期を通して盛んに移入・紹介されたホイトマン、カーペンター、トラウベルの民衆思想を受容して、詩壇において展開した詩の民主化運動が民衆詩の活動だった。

詩的運動としては明治期の口語自由詩の延長上にあり、口語自由詩が形式の破壊をめざしたのに対して、社会全体のなかに生きる自覚・自立した個性である市民とともに共有する詩的世界の創出という内容の革命をめざすものであった。民衆の詩であるからには、形式は徹底的に口語自由詩であることを必要とした。明治期に始まった口語自由詩は民衆詩とともに完成した。

資本主義経済・産業構造の進展にともなう都市生活の変化、農村の疲弊、プロレタリアートの階級意識の強化、そしてとりわけ大正6年のロシア革命の波動を受けて、社会主義思想が高まり各種労働運動が盛んになった。大正7年夏の「米騒動」もこうした時代状況の一波であった。

一方、「白樺」を中心とする個我崇拜、人間賛歌、人道主義など、生のよろこびを求め高みにむかって精神的に伸長しようとする肯定的で明朗な思潮も並存していた。

このような現実に応じ民衆詩の活動も詩的テーマも、あるいは社会思想的であり、あるいは都会派的であり、あるいは田園指向的であり、あるいは「白樺」的であった。民衆詩派詩人たちによる、大正11年1月の『日本社会詩人詩集』（日本評論社出版部）と、翻訳『泰西社会詩人詩集』（同社）は、この派の社会思想的方向性に沿う成果であった。後者はホイトマン、トラウベル、エマーソンの訳詩集である。

このシリーズに『エルハアラン詩抄』9詩篇（104～112）が入っている。翻訳者は百田宗治になっているが、金子光晴が代訳していることが百田によ

って明記されている。詩篇はそれぞれ詩集『生活の相貌』『無量の壮麗』『至上律』『十二ヶ月』に収録されているもので、人と物の躍動する生命の一体感を雄勁な律動で燃え立つように詠いあげられた自由詩であって、「社会詩人」としてのヴェルハーレンの一面を示すモデルとなる詩篇では必ずしもない。たしかにヴェルハーレンは1890年代に、ベルギー労働党党首で社会主義者ヴァンデルヴェルドに協力して民衆運動に加わったこともあるが、彼の思想は政治的というにはあまりに観念的・理想主義的な自由平等思想である。しかし、その時代の思想から社会主義3部作といわれる詩集が生まれているので、その詩集からなぜ選ばなかったのか疑問が残るところである。それでも、詩篇「群衆」は4頁にわたって「内務省の厳達により削除」の処分を受けている。削除された部分は、「猛り狂え、(中略)ひとりの首謀が四辻の隅で口をひらくと、/民衆はその言葉をよくも聴きとらずに、/もうその後に続いて一みよ怒り狂いながら/国王をひき倒しては辱しめる、/燦たる偶像の台をうち落としてはうち砕く。(後略)」という内容で、字面通り読めば、民衆の暴動を思わせる場面だが、この沸き立つような群衆のエネルギーに脅かされている都市の幻想を前に、「私のなかで、私の心は増殖し拡大され昂ぶり、/躍動するのを感じる」と、自分の心にあるうち騒ぐ群衆の活力を一体感情として詠っているものであり、狭い社会主義意識がテーマであるよりは、活力信仰を表現する轟々たる律動を詠うこと自体がテーマなのである。

それはともかく、前述の『日本社会詩人詩集』においても、百田宗治の詩「騒擾の上に」が6頁にわたって、同様に伏字処分になっており、大震災前後の社会主義思想に対する権力側の抑圧強化をまざまざと見せつけられる。

『エルハアラン詩抄』の実際の翻訳者である金子光晴は、高村光太郎についてもっとも多くヴェルハーレン詩篇(約70篇)を翻訳した詩人である。金子光晴は上述の訳詩集のほか、大正14年3月『ブエルハアレン詩集』(新潮社)、同年8月『近代仏蘭西詩集』(紅玉堂)などでヴェルハーレン詩篇を翻訳している(141~180)。

金子光晴は百田宗治ほか民衆派詩人たちとの交流も深く、「日本詩人」にも関係したが、金子の詩人として資質は「民衆詩人」という単一のカテゴリーには納まりきらない。大正8年から9年までのベルギー滞在中、ヴェルハーレンのほか象徴派、高踏派の詩を耽読し、その読書体験から帰国後大正12年の『こがね虫』が成立した。この詩集についてヴェルハーレンの影響を分析的に検証しなければならない。⁽¹⁵⁾

民衆詩人たちは、圧倒的にホイットマンの影響を受けているが、ヴェルハーレンについてもホイットマンと同じ方向をむいている詩人として、関心をもっていた。「日本詩人」「白樺」などに発表されている都会詩、田園詩、自然詩、樹木賛歌などの民衆詩には、多かれ少なかれヴェルハーレンの影響が感じられる。ホイットマンの影響とは別に、ヴェルハーレンの影響がどれくらい特定できるか、これも今後の研究課題である。とくに尾崎喜八は民衆詩人たちのなかではもっとも強くヴェルハーレンの影響を受けている (XXXII, XXXVI)。

8 高村光太郎 紹介と影響

高村光太郎をヴェルハーレンと「最も心臓の鼓脈の近い詩人」と評したのは金子光晴である。⁽¹⁶⁾ さらに気質や骨格の類似まで指摘されている。⁽¹⁷⁾ 高村光太郎は、明治43年7月、詩集『十二ヶ月』から「あはれなる者 (二月)」を訳したのが最初で、大正8年以降大正期を通し毎年翻訳・紹介し、全訳詩集『明るい時』『午後の時』『天上の炎』を含み、昭和33年まで約120篇にのぼるヴェルハーレン詩篇を訳した。

彼は「詩の翻訳は結局不可能である。意味を伝へ、感動を伝へ、明暗を伝へる事位は出来るかも知れないが、原の「詩」はやはり向うに残る。(中略) 詩の翻訳は結局一種の親切に過ぎない」⁽¹⁸⁾ といっているが、高村光太郎の訳詩法は、なによりも原詩の「心」を伝えようとする事である。原詩の表現している世界をまず全体として捉え、彼自身の詩魂、詩想、リズムとの同化

を通して再構成しようとする。この方法は、場合によっては、原詩を構成している要素の細部に対する軽視、文法的解釈への無頓着な態度として顕われる。宗左近氏は、高村訳の強引な自分の世界へのねじ曲げの危険を指摘し、「一口に言えば、家父長的性格⁽¹⁹⁾」であると評している。しかし、片々たる誤訳という瑕にもかかわらず、原詩とみごとに共振するリズムは「一種の親切」をはるかに超え、彼の訳詩は大正期における口語自由詩が到達した最高の詩法を示している。彼にはさらに、優れたヴェルハーレン評伝があり (XLIII)、高村光太郎は日本におけるヴェルハーレンの紹介者としてきわめて大きな功績を残している。

詩人である高村光太郎はヴェルハーレンからどのような影響を受けているか。この二人の詩人のように、本来的に同質な資質をもっている場合、それだけに文学的影響は測りがたい。一例だけ挙げてみよう。原詩は詩集『幻想の村々』(1895)のなかの詩篇「風」である。高村光太郎訳と並べて示す。⁽²⁰⁾

ヴェルハーレンの自由詩の詩法が確立し、フランドルの風と雪のカダンスと詩の律動が一体となって鳴り響いている。

Sur la bruyère longue infiniment,	かぎりなくつづく茂みの地に,
Voici le vent cornant Novembre;	十一月を吹き鳴らす風,
Sur la bruyère, infiniment,	かぎりなく, 茂みの地に,
Voici le vent	風は
Qui se déchire et se démembre,	破れ又裂ける。
En souffles lourds, battant les bourgs;	深い息吹に, 町々をうちながら,
Voici le vent,	風が,
Le vent sauvage de Novembre.	十一月の粗暴な風が。

Aux puits des fermes,	農家の井戸では,
Les sceaux de fer et les poulies	鉄の水桶と滑車とが
Grinent;	齒ざしりする。

Aux citernes des fermes,
Les sceaux et les poulies
Grincent et crient.

農家の貯水槽では
水桶と滑車とが
歯ざしりし哭き叫ぶ。

Le vent rafle, le long de l'eau,
Les feuilles mortes des bouleaux,
Le vent sauvage de Novembre;
Le vent mord, dans les branches,
Des nids d'oiseaux;
Le vent râpe du fer
Et précipite l'avalanche,
Rageusement, du vieil hiver,
Rageusement, le vent,
Le vent sauvage de Novembre.

風は、河に沿って、掻き払ふ、
樺の木の枯っぱを。
十一月の粗暴な風。
風は噛む、枝の中で、
鳥の巣を。
風は鉄をすりへらし
又雪崩を吹きおとす、
たけり狂って、老いたる冬の、
たけり狂って、風は、
十一月の粗暴な風は。

このあとさらに6連続く長詩だが、原詩と訳詩のリズムがいかに無理なく共振しているか、ここまでの部分でも十分わかる。この詩のリズムは[r][l][v][s][f]音の畳韻法と、le vent, le vent sauvage de Novembreのリフレインと、たたみかけるような10,8,6,4音綴からなる長短の詩行の交錯から発し、吹きすさぶ寒風の厳しさとエネルギーを表現している。

高村光太郎もヴェルハーレン同様、詩法のひとつとして、リフレインを効果的に使った詩人であるが、ここでも、訳詩は原詩のリフレイン効果を巧みに生かしきっている。この原詩および訳詩は、高村光太郎の創作詩「犬吠の太郎」、「冬が来る」、「狂者の詩」、「冬の詩」、「冬が来た」などを想起させる。「犬吠の太郎」の「太郎、太郎 / 犬吠の太郎、馬鹿の太郎」「けふも海が鳴ってゐる」「ステテレカンカン⁽²¹⁾」や、「狂者の詩」の「吹いて来い、吹いて来い」「秩父おろしの寒い風」「山からこんころりんと吹いて来い」「世は末法だ、吹いて来い⁽²²⁾」や、「冬の詩」の「冬だ、冬だ、何処もかも冬だ⁽²³⁾」が作

り出す律動と同質である。さて、ここで影響を安易に指摘していいものか。創作詩は大正元年、2年に書かれているが、この詩を書いたとき、高村光太郎はすでに原詩を読んでいただろうか。ちなみに、訳詩は大正9年に書かれたものである。原詩を読んでいたことが証明されなければ影響関係は成り立たない。大正2、3年には高村光太郎の固有のリズムと詩法は確立していた。したがって、方向は逆なのであって、すでに高村光太郎の詩魂のなかで鳴り響いていたリズムがヴェルハーレンの詩と出会い共振を発したればこそ、彼の優れた訳詩が生まれ得たのではないか、と考えることも可能なのである。

高村光太郎という詩人は、内に詩魂（彼はこれを「⁽²⁴⁾氣」という言葉でいいあらわしている）が張りつめ、あふれて、リズムと形式などの詩的造型がそれにとまなうように、おのずと出来上がって詩が鳴り出すていの、その意味できわめて類まれな倫理的な詩人であった。高村光太郎独特のリズムが少しずつ作動しはじめるのは「新緑の毒素」あたりからであるが、しかしな⁽²⁵⁾んといっても彼の詩魂と詩的造型が決定的に確定するには、長沼智恵子との出会いが必要であった。

「ヴェルハーレンの詩集『明るい時』との出会いがなかったら、高村光太郎の『智恵子抄』は生まれなかったかもしれない⁽²⁶⁾」という見方は今や定説になっている。ヴェルハーレンとマルト、光太郎と智恵子の関係は不思議なほど類似している。光太郎もヴェルハーレンと同じくデカダンスの暗闇を彷徨した時期があり、二人はそれぞれマルト、智恵子によって救われた。おまけにマルトも智恵子も画家を志していた、というところまで偶然の吻合は及んでいる。光太郎が智恵子詩篇を書き出すのは明治44年7月からで、その時点でヴェルハーレンの愛の詩集のような詩集（『智恵子抄』）として将来収録しようなどと考えていたとは思えない。もしその時点で、ヴェルハーレンの閱歴について知識をもっていたとしたら、自分の閱歴との類似に氣をとめただろうが、そのためにヴェルハーレンの『明るい時』にならって、智恵子詩篇を書こうなどと思っただろうか。

智恵子詩篇とヴェルハーレンの愛の詩集を照合すれば、詩句や発想やモチーフの一致を見つけることはさして困難なことではない。この一致はヴェルハーレンの愛の詩の介在がなければ生じ得ないものなのか。閱歷の類似が発想の類似を生むのは必然ではないだろうか。むしろ、詩句やモチーフの一致にもかかわらず、両者の詩的世界の異質性にこそ注目すべきではないのか。

高村光太郎が志向した「近代」はなによりも個我の倫理の上に築かれるべきものであった。この倫理を支えるものとして導入されたのが彼独特の「自然の理法」という理念である。この自然の意志、自然の理法にいかに感応するか、その強弱、純不純が芸術と倫理の価値、生の価値をきめる、というのが彼の基本思想である。彼の「自然」は倫理的な相を帯びていて、「自然の理法」に随順することが真の個我への道なのである。そして愛も「自然の理法」の働きに参入する行為なのである。自然の理法は両極性をもっていて、一つは遠心的に働き、ひたすら豊饒に発散する力であり、もう一つは求心的に働き浄化を求めて内面世界に収斂する。一つは「人間愛」として、もう一つは「離群癖」として、共存し、「白熱と堅氷とはわたしの故郷である。二者同一である」⁽²⁷⁾と彼がいうように、この二元的方向性は彼の芸術と倫理の構造なのである。長沼智恵子は彼の前に、この「自然の理法」を体現している女性として現れたのである。こうして智恵子は高村光太郎が志向する「近代」を建設するのにもっともふさわしいパートナーとなる。

『智恵子抄』が愛の詩集であることはたしかだが、詠われている愛は、すべてなんらかの意味で求道的であり、詩的世界を構成している「場」は「がらんとした家」「がらんだうなアトリエ」⁽²⁸⁾「がらんと晴れ渡った北国」というイメージで示されている。愛の磁場の象徴は「蕭条たるアトリエ」なのである。これをヴェルハーレンの愛の3部作と対比してみれば、両者の詩的世界がまったく異質なものであることは明白である。ヴェルハーレンにおいては、終始、花園が愛の世界を構成し、ばら、池、鳥、陽光のなかで愛は祈りでありやすらぎである。自然とのやさしい交感のなかに自己を解放する。こ

の花園は「楽園」のイメージと重なる。愛はエゴイズムを退け人間をとりまく万物との融合をおしすすめる力となる。個我は問題にならない。個我は宇宙のリズムと一体になる。高村光太郎が自然の理法に随順するために求心的な倫理を追究したのに対し、ヴェルハーレンは個我から他者へと遠心的に自己を開放した。両者は自然の理法に対して対極的な方向をとり、倫理的には、高村光太郎が冬の倫理を生の原理としたのに対してヴェルハーレンは一切賛美のオプティミズムに到達した。この方向性の違いが『智恵子抄』と『時』3部作の世界をまったく異質なものにしている（LX, LXIV, LXVII）。

（表2） エミール・ヴェルハーレン作品（詩篇、戯曲、評論）邦訳略年表

- ◆ 1 の *Images Japonaises* のみ原文。
- ◆ 刊行書で初出の場合を除き、初出訳が後の刊行書に再録されている場合はナンバーを新しくしない。
- ◆ 同一訳者による同一作品訳が複数回収録されている場合、再録誌・書のすべてについて追跡することはない。
- ◆ 各種文献中で当該詩篇邦訳の存在が指摘されていても、初出誌未見などの理由で、確認できていないものは除く。

1	M.29	<i>Images Japonaises</i> (5詩篇；鈴木華邨画、発行者：長谷川武次郎)
2	M.34	評論「悲哀」（上田敏：「新文芸」5月）
3	M.34	評論「仏蘭西の哀観詩人」（上田敏：「帝国文学」6月）
	M.35	上田敏『最近海外文学統編』（文友館）の中「悲哀」；2,3
4	M.37	「鷺の歌（象徴詩）」（上田敏：「明星」1月号；Parabole, in <i>B.R.</i> ）
5	M.38	「水かひば」（上田敏：「明星」6月号；L'Abreuvoir, in <i>Fl.</i> ）
6	M.38	「法の夕」（第2詩篇；上田敏：「明星」6月号；Soir religieux, in <i>M.</i> ）
7	M.38	「畏怖」（上田敏：「明星」9月号；La Peur, in <i>Ap.</i> ）
8	M.38	「火宅」（部分訳；上田敏：「明星」9月号；Les Villes, in <i>F.T.</i> ）
9	M.38	「時鐘」（上田敏：「明星」10月号；Les Horloges, in <i>B.R.</i> ）
	M.38	上田敏『海潮音』（本郷書院、10月）；3（部分）4,5,6,7,8,9
10	M.41	「夜」（内藤水曜：「帝国文学」8月号；La Nuit, in <i>B.R.</i> ）
11	M.41	「嗟嘆」（内藤水曜：「帝国文学」8月号；Novembre, in <i>Ibid.</i> ）
12	M.42	「風車」（内藤水曜：「帝国文学」8月号；Le Moulin, in <i>S.</i> ）
13	M.42	「雨」（内藤水曜：「帝国文学」9月号；La Pluie, in <i>V.I.</i> ）
14	M.43	「群衆」（内藤水曜：「帝国文学」3月号；La Foule, in <i>V.V.</i> ）
15	M.43	「俊傑」（上田敏：「芸文」第1年第3号、6月；Les Élus, in <i>M.S.</i> ）
16	M.43	「あはれなる者（二月）」（高村光太郎：「創作」第1巻第5号、7月、「訳詩三章」；Février, Les Pauvres, in <i>D.M.</i> ）
17	M.43	「世界」（上田敏：「芸文」第1年第6号、9月；Le Monde, in <i>M.S.</i> ）
18	M.43	「都会」（上田敏：「文芸」第1年第7号、10月、総題「新声」；La Ville, in <i>C.H.</i> ）
19	M.43	「思想」（上田敏：「文芸」第1年第7号、10月、Les Idées, in <i>M.S.</i> ）
20	M.44	「不可能」（上田敏：「朱槿」創刊号、11月；L'Impossible, in <i>F.T.</i> ）
21	M.45	戯曲「僧院」（森鷗外：「歌舞伎」第139号、1月；第140号、2月；第141号、3月；第142号、4月；第145号、7月；第146号、8月；第147号、9月、第148号、10月；Le Cloître, 1900）

22	T.2	「金貨」(よさの・ひろし:「帝国文学」第19巻第4号、L'Or, in <i>B.M.</i>)
23	T.2	「琴弾き」(よさの・ひろし:「帝国文学」同上; Les Ménétrier, in <i>Ibid.</i>)
24	T.2	「牧場」(よさの・ひろし:「帝国文学」同上; Le Pré, in <i>Ibid.</i>)
25	T.2	「燃ゆる少女」(よさの・ひろし:「帝国文学」同上; La Fille ardente, in <i>Ibid.</i>)
26	T.2	「恋人等」(よさの・ひろし:「帝国文学」同上; Les Amoureux, in <i>Ibid.</i>)
	T.3	与謝野寛『リラの花』(東雲堂書店、11月) ; 22, 23, 24, 25, 26
27	T.3	「路」(同上書; Les Routes, in <i>B.M.</i>)
28	T.3	「田舎の対話」(第1詩篇:同上書; Dialogue rustique, in <i>Ibid.</i>)
29	T.3	「麦の積藁」(同上書; Les Meules, in <i>Ibid.</i>)
30	T.3	「田舎の対話」(第2詩篇:同上書; Dialogue rustique, in <i>Ibid.</i>)
31	T.3	「影」(同上書; Les Ombres, in <i>Ibid.</i>)
32	T.3	「農婦」(同上書; La Fermière, in <i>Ibid.</i>)
33	T.3	「老の踊」(同上書; La Danse des Vieux et des Vieilles, in <i>Ibid.</i>)
34	T.3	「穀物車の挽子」(同上書; Le Roulier, in <i>Ibid.</i>)
35	T.3	「死」(同上書; Le Mort, in <i>Ibid.</i>)
36	T.3	「快飲」(同上書; Le franc Buveur, in <i>Ibid.</i>)
37	T.3	「二王子」(同上書; Les deux Enfants de Roi, in <i>Ibid.</i>)
38	T.3	「出て行け」(同上書; Allez-vous-en, in <i>Ibid.</i>)
39	T.3	「木靴師」(同上書; Le Sabotier, in <i>Ibid.</i>)
40	T.3	評論「レムブラント(1)」(小泉鉄:「白樺」第5巻第1号、1月; Rembrandt, 1904)
41	T.3	戯曲「僧院」(森鷗外:「歌舞伎」第168号, 6月; 第169号, 7月; 第170号, 8月; 第171号, 9月)
	T.4	森鷗外『稲妻』(通一舎、千栄山房叢書)の中「僧院」; 21, 41
42	T.6	「聖ジョルジュ」(富田碎花:「詩人」2月号; Saint Georges, in <i>Ap.</i>)
43	T.6	「明るい時 (1)」(富田碎花:「詩人」2月号; H.C.; 第I詩篇)
44	T.6	「力行」(川路柳虹:「伴奏」第3輯春の巻、4月; L'Action, in <i>V.V.</i>)
45	T.6	「至高の律」(部分訳; 曾野簡治:「伴奏」第3輯春の巻、4月; Le Paradis II, extrait, in <i>R.S.</i>)
46	T.6	「レムブラント(論)」(古屋芳雄:「白樺」第8巻8月号; 9月号; 10月号; 11月号; Rembrandt, 1904)
47	T.7	「レムブラント(論)」(古屋芳雄:「白樺」第9巻1月号、4月号; Rembrandt, 1904)
48	T.7	戯曲「フィリップ二世(三幕悲劇)」(新城和一:「白樺」第9巻4月号, 5月号; Philippe II, 1901)
49	T.7	「風車」(堀口大学:「花月」(第2巻、6月; Le Moulin, in <i>S.</i>)
50	T.8	「健康」(高村光太郎:「新進詩人」第2巻第10号、11月; Belle Santé, in <i>F.H.</i>)
51	T.8	「新しき市」(第1詩篇:堀口大学:「現代詩歌」第2巻第10号、11月; La Ville nouvelle, in <i>Ibid.</i>)
52	T.8	「今日の人に」(堀口大学:「現代詩歌」第2巻第10号、11月; A l'Homme d'aujourd'hui, in <i>Ibid.</i>)
53	T.9	「夕」(西条八十『静かなる眉』(尚文堂)の中; H.C.:第XIII詩篇)
54	T.9	「風」(高村光太郎:『日本現代詩集附録泰西名詩選』春陽堂、井上康文編; Le Vent, in <i>V.I.</i>)
55	T.9	「1915年の春」(高村光太郎:、同上書; Le Printemps de 1915, in <i>A.G.</i>)
56	T.9	「病院」(高村光太郎:同上書; Hôpitaux, in <i>Ibid.</i>)
	T.9	上田敏『牧羊神』(金尾文淵堂、10月); 15, 17, 18, 19
57	T.9	「都会」(新城和一『触手ある都会; 錯覚の田園』洛陽堂、11月; La Ville, in <i>C.H.</i>)
58	T.9	「野原」(同上書; Les Plaines, in <i>Ibid.</i>)
59	T.9	「狂人の歌」(第1詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
60	T.9	「悪い忠告を与ふるもの」(同上書; Le Donneur de mauvais Conseils, in <i>Ibid.</i>)
61	T.9	「狂人の歌」(第2詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
62	T.9	「巡礼」(同上書; Pèlerinage, in <i>Ibid.</i>)
63	T.9	「狂人の歌」(第3詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
64	T.9	「悪熱」(同上書; Les Fièvres, in <i>Ibid.</i>)
65	T.9	「狂人の歌」(第4詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
66	T.9	「罪」(同上書; Le Péché, in <i>Ibid.</i>)
67	T.9	「狂人の歌」(第5詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
68	T.9	「乞食」(同上書; Les Mendiants, in <i>Ibid.</i>)
69	T.9	「村の祭」(同上書; La Kermesse, in <i>Ibid.</i>)
70	T.9	「狂人の歌」(第6詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
71	T.9	「天罰」(同上書; Le Fléau, in <i>Ibid.</i>)
72	T.9	「狂人の歌」(第7詩篇; 同上書; Chanson de Fou, in <i>Ibid.</i>)
73	T.9	「出発」(同上書; Le Départ, in <i>Ibid.</i>)
74	T.9	「鋤」(同上書; La Bêche, in <i>Ibid.</i>)
75	T.9	「野原」(同上書; La Plaine, in <i>V.T.</i>)

76	T.9	「都会の魂」(同上書; L'Âme de la Ville, in <i>Ibid.</i>)
77	T.9	「銅像(僧侶)」(同上書; Une Statue (Moine), in <i>Ibid.</i>)
78	T.9	「大寺院」(同上書; Les Cathedrales, in <i>Ibid.</i>)
79	T.9	「銅像(軍人)」(同上書; Une Statue (Soldat), in <i>Ibid.</i>)
80	T.9	「港」(同上書; Le Port, in <i>Ibid.</i>)
81	T.9	「見世物」(同上書; Les Spectacles, in <i>Ibid.</i>)
82	T.9	「散歩してゐる女」(同上書; Les Promeneuses, in <i>Ibid.</i>)
83	T.9	「銅像(資本家)」(同上書; Une Statue (Bourgeois), in <i>Ibid.</i>)
84	T.9	「工場」(同上書; Les Usines, in <i>Ibid.</i>)
85	T.9	「株式取引所」(同上書; La Bourse, in <i>Ibid.</i>)
86	T.9	「慈善市」(同上書; Le Bazar, in <i>Ibid.</i>)
87	T.9	「肉を売る店」(同上書; L'Étal, in <i>Ibid.</i>)
88	T.9	「反抗」(同上書; La Révolte, in <i>Ibid.</i>)
89	T.9	「博物館で」(同上書; Le Masque, in <i>Ibid.</i>)
90	T.9	「銅像(使徒)」(同上書; Une Statue (Apôtre), in <i>Ibid.</i>)
91	T.9	「死」(同上書; La Mort, in <i>Ibid.</i>)
92	T.9	「探索」(同上書; La Recherche, in <i>Ibid.</i>)
93	T.9	「観念」(同上書; Les Idées, in <i>Ibid.</i>)
94	T.9	「未来の方へ」(同上書; Vers le Futur, in <i>Ibid.</i>)
	T.9	堀口大学「失はれた宝石」(初山書房、12月); 51
95	T.10	「明るい時 15, 19」(高村光太郎:「詩の泉」第1号4月、 <i>H.C.</i> , XV, XIX,)
96	T.10	「吾家のまはり」(高村光太郎:「詩の泉」第3号6月、 <i>Autour de ma Maison</i> , in <i>M.S.</i>)
	T.10	高村光太郎『明るい時』(藝術社、10月); <i>H.C.</i> ; 95, 96
97	T.10	「明るい時1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,16,17,18,20,21,22,23,24,25,26,27,28,29,30」(同上書; <i>H.C.</i>)
98	T.10	「小さな聖母(五月)」(同上書; <i>Mai, La petite Vierge</i> , in <i>D.M.</i>)
99	T.10	「サンジャンさま(六月)」(同上書; <i>Juin, La Saint-Jean</i> , in <i>Ibid.</i>)
100	T.10	「風を称ふ」(同上書; <i>A la Gloire du Vent</i> , in <i>M.S.</i>)
101	T.10	「思想家」(高村光太郎:「思想」第2号、11月; <i>Les Penseurs</i> , in <i>Ibid.</i>)
102	T.10	「ミケランジェ」(高村光太郎:「白樺」第12巻第12号、12月; <i>Michel-Ange</i> , in <i>R.S.</i>)
103	T.10	「海に向かって」(高村光太郎:「藝術」第1巻第3号、12月、 <i>Vers la Mer</i> , in <i>V.V.</i>)
		古屋芳雄『レムブラント』(岩波書店); 44, 47
104	T.11	「群衆」(百田宗治[金子光晴]:「エルハアラン詩抄」『泰西社会詩人詩集』日本評論社出版部、1月; <i>La Foule</i> , in <i>V.V.</i>)
105	T.11	「波止場に沿うて」(同上書; <i>Au Bord du Quai</i> , in <i>Ibid.</i>)
106	T.11	「樹木」(同上書; <i>L'Arbre</i> , in <i>M.S.</i>)
107	T.11	「世界」(同上書; <i>Le Monde</i> , in <i>Ibid.</i>)
108	T.11	「生貧 二月」(同上書; <i>Février, Les Pauvres</i> , in <i>D.M.</i>)
109	T.11	「欣喜」(同上書; <i>La Joie</i> , in <i>M.S.</i>)
110	T.11	「ペルゼー」(同上書; <i>Persée</i> , in <i>R.S.</i>)
111	T.11	「侵略」(同上書; <i>La Conquête</i> , in <i>M.S.</i>)
112	T.11	「輝ける風に」(同上書; <i>A la Gloire du Vent</i> , in <i>Ibid.</i>)
113	T.11	「空をたたふ」(高村光太郎:「嵐」5月号、 <i>A la Gloire des Cieux</i> , in <i>M.S.</i>)
114	T.11	「散歩」(高村光太郎:「生長する星の群」第2巻第6号、7月; <i>Promenades</i> , in <i>F.H.</i>)
115	T.11	「未来(序詩)」(高村光太郎:「明星」第2巻第2号、7月; <i>L'Avenir</i> , in <i>Ibid.</i>)
116	T.11	「午後の時(9)」(高村光太郎:「明星」第2巻第2号、7月; <i>H.A.</i> , IX)
117	T.11	「わが友風景」(高村光太郎:「白樺」第13巻第11号、11月; <i>Mon Ami le Paysage</i> , in <i>F.H.</i>)
118	T.12	「ヴェルハアランの愛の言葉・午後の時27」(高村光太郎:「婦人之友」第17巻第1号、1月; <i>H.A.</i> , XXVII)
119	T.12	「明け渡せ」(高村光太郎:「白樺」第14巻第1号、1月; <i>Allez-vous-en</i> , in <i>B.M.</i>)
120	T.12	「たとえ(譬)」(高村光太郎:「明星」第3巻第5号、5月; <i>Parabole</i> , in <i>B.R.</i>)
121	T.12	「エルハアランの小曲:午後の時3、4、5」(高村光太郎:同上誌; <i>H.A.</i> , III, IV, V)
122	T.12	「楽園」(高村光太郎:「明星」第4巻第3号、9月; <i>Le Paradis</i> , in <i>R.S.</i>)
123	T.13	「午後の時1、2、8」(高村光太郎:「向日葵」第1巻第1号、5月; <i>H.A.</i> , I, II, VIII)
124	T.13	「午後の時6」(高村光太郎:「向日葵」第1巻第3号、7月; <i>Ibid.</i> , VI)
125	T.13	「種馬」(高村光太郎:同上誌; <i>L'Étalon</i> , in <i>Pl.</i>)
126	T.13	「或る夕暮の路ゆく人に」(高村光太郎:「明星」第5巻第1号、6月; <i>Au Passant d'un Soir</i> , in <i>F.H.</i>)
127	T.13	「私の都」(高村光太郎:「明星」第5巻第2号、7月; <i>Ma Ville</i> , in <i>Ibid.</i>)
128	T.13	「新しい都」(高村光太郎:「明星」第5巻第3号、8月; <i>La Ville nouvelle</i> , in <i>Ibid.</i>)

129	T.13	「午後の時12,18」(高村光太郎:「向日葵」第一巻第5号、9月; H.A., XII, XVIII)
130	T.13	「問題」(高村光太郎:「明星」第5巻第4号、9月; Problèmes, in F.H.)
131	T.13	「朝」(高村光太郎:同上誌; Un Matin, in F.T.)
132	T.13	「砂濱で」(高村光太郎:同上誌; Sur les Grèves, in Ibid.)
133	T.13	「わが人種」(高村光太郎:同上誌; Ma Race, in Ibid.)
134	T.13	「不可能」(高村光太郎:同上誌; L'Impossible, in Ibid.)
135	T.13	「田舎の対話6」(高村光太郎:「明星」第5巻第5号、10月; Dialogue rustique, in B.M.)
136	T.13	「花の方へ」(高村光太郎:同上誌; Vers les Fleurs, in F.H.)
137	T.13	「午後の時11,13,15,16,19,20,21,23,24,28」(高村光太郎:「明星」第5巻第6号、11月; H.A.)
138	T.13	「熱烈な生活」(高村光太郎:「向日葵」第1巻第7号、12月; La Vie ardente, in F.H.)
139	T.14	「トンネル」(高村光太郎:「明星」第6巻第1号、1月; Le Tunnel, in Ibid.)
140	T.14	「死者」(高村光太郎:「虹」第2号、2月; Les Morts, in Ibid.)
141	T.14	「厳寒(一月)」(金子光晴:『ブエルハアレン詩集』新潮社、3月; Janvier, Le Froid, in D.M.)
142	T.14	「貧者(二月)」(同上書; Février, Les Pauvres, in Ibid.)
143	T.14	「小さな処女(五月)」(同上書; Mai, La petite Vierge, in Ibid.)
144	T.14	「セント・ジャンの祭(六月)」(同上書; Juin, La Saint-Jean, in Ibid.)
145	T.14	「蠅(八月)」(同上書; Août, Les Mouches, in Ibid.)
146	T.14	「狩猟(十月)」(同上書; Octobre, La Chasse, in Ibid.)
147	T.14	「海の方へ」(同上書; Vers la Mer, in V.V.)
148	T.14	「都市」(同上書; La Ville, in C.H.)
149	T.14	「平原」(同上書; Les Plaines, in Ibid.)
150	T.14	「乞食」(同上書; Les Mendiants, in Ibid.)
151	T.14	「鋤」(同上書; La Bêche, in Ibid.)
152	T.14	「都市の魂」(同上書; L'Âme de la Ville, in V.T.)
153	T.14	「雨」(同上書; La Pluie, in V.I.)
154	T.14	「漁夫」(同上書; Les Pêcheurs, in Ibid.)
155	T.14	「パラダイス」(同上書; Le Paradis, in R.S.)
156	T.14	「樹木」(同上書; L'Arbre, in M.S.)
157	T.14	「我家のめぐり」(同上書; Autour de ma Maison, in Ibid.)
158	T.14	「世界」(同上書; Le Monde, in Ibid.)
159	T.14	「山嶽」(同上書; Le Mont, in V.V.)
160	T.14	「群衆」(同上書; La Foule, in Ibid.)
161	T.14	「森」(同上書; La Forêt, in Ibid.)
162	T.14	「水の唄」(同上書; Le Chant de l'Eau, in B.M.)
163	T.14	「散歩」(同上書; Promenades, in F.H.)
164	T.14	「並木の第一の樹」(同上書; Le premier Arbre de l'Allée, in Ibid.)
165	T.14	「明るいつ 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7」(同上書; H.C. I, II, III, IV, V, VI, VII)
166	T.14	「午後の刻 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8」(同上書; H.A. I, II, III, IV, V, VI, VII, VIII)
167	T.14	「夕暮の時刻 1, 2, 3, 4, 5, 6」(同上書; H.S. I, IV, VI, X, XIII, XV)
168	T.14	「新しい都会」(同上書; La Ville nouvelle, in F.H.)
169	T.14	「我都会」(同上書; Ma Ville, in Ibid.)
170	T.14	「花々に寄せる」(同上書; Vers les Fleurs, in Ibid.)
171	T.14	「十一月」(同上書; Novembre, in B.R.)
172	T.14	「小舟」(同上書; La Barque, in Ibid.)
173	T.14	「修道士の臨終」(同上書; Agonie de Moine, in M.)
174	T.14	「朝」(同上書; Les Matines, in Ibid.)
175	T.14	「黄昏」(同上書; Les Vêpres, in Ibid.)
176	T.14	「修道士の帰途」(同上書; Rentrée des Moines, in Ibid.)
177	T.14	「穀倉」(同上書; Les Greniers, in Fl.)
178	T.14	「果樹牆」(同上書; Les Espaliers, in Ibid.)
179	T.14	「パン製造」(同上書; Cuisson du Pain, in Ibid.)
180	T.14	「風の礼讃」(同上書; A la Gloire du Vent, in M.S.)
	T.14	高村光太郎『天上の炎』(新しき村出版部、3月); 50,114,115,117,126,127,128,130,136,138,139,140
181	T.14	「昔の信仰」(同上書; L'ancienne Foi, in Les Flammes hautes, 1917)
182	T.14	「私の眼よ」(同上書; Mes Yeux, in Ibid.)
183	T.14	「誇」(同上書; L'Orgueil, in Ibid.)
184	T.14	「機械」(同上書; Les Machines, in Ibid.)

185	T.14	「港の突堤で」(同上書; Sur les Môles du Port, in <i>Ibid.</i>)
186	T.14	「今日の人に」(同上書; A l'Homme d'aujourd'hui, in <i>Ibid.</i>)
187	T.14	「機会」(同上書; La Chance, in <i>Ibid.</i>)
188	T.14	「波止場で」(同上書; Sur les Quais, in <i>Ibid.</i>)
189	T.14	「木蔭」(同上書; Le Lierre, in <i>Ibid.</i>)
190	T.14	「東西南北」(同上書; L'Est, l'Ouest, le Sud, le Nord, in <i>Ibid.</i>)
191	T.14	「森」(同上書; La Forêt, in <i>Ibid.</i>)
192	T.14	「並木の第一樹」(同上書; Le premier Arbre de l'Allée, in <i>Ibid.</i>)
193	T.14	「私の集(題跋詩)」(同上書; Épilogue; ma Gerbe, in <i>Ibid.</i>)
	T.14	金子光晴『近代仏蘭西詩集』(紅玉堂、8月); 142, 144, 153, 154, 160
	T.14	堀口大学『月下の一群』(第一書房、9月); 49, 52
194	S.3	「葬式(戦争の赤い翼)」(高村光太郎:「至上律」第5輯、7月; Du Deuil, in <i>A.G.</i>)
195	S.3	「午後の時30」(高村光太郎:「至上律」第5輯、7月; <i>H.A.</i> XXX)
	S.3	高村光太郎:同上誌; 54, 102, 103, 113, 120, 133
	S.3	高村光太郎:同上誌; 第6輯、12月; 121 (3), 123 (1,2)
	S.4	高村光太郎:同上誌; 第7輯、1月; 97 (3,4,5,6)
196	S.4	「午後の時7,8の一部」(高村光太郎:「至上律」第8輯、3月; <i>Ibid.</i> VII, VIII)
197	S.4	「私の部屋(戦争の赤い翼)」(高村光太郎:「学校」3月; Ma Chambre, in <i>A.G.</i>)
198	S.4	「午後の時8,9」(高村光太郎:「至上律」第9輯、4月; <i>H.A.</i> VIII, IX)
199	S.4	「午後の時10」(高村光太郎:「至上律」第10輯、5月; <i>Ibid.</i> X)
		高村光太郎:同上誌; 129 (12), 137 (11)
		高村光太郎:同上誌; 第11輯、8月; 137 (13)
200	S.8	「出立」(山内義雄『山内義雄訳詩集』白水社、12月; Le Départ, in <i>C.H.</i>)
	S.16	「午後の時1~13」(高村光太郎:村上菊一郎編『仏蘭西詩集』青磁社、11月; <i>H.A.</i> I ~ XIII); 116, 121, 123, 124, 129 (12), 137 (13), 196, 198, 199
201	S.18	「午後の時14~24」(高村光太郎:菱山修三編『続仏蘭西詩集』青磁社、1月; <i>Ibid.</i> XIV ~ XXIV); 129 (18), 137
	S.26	(金子光晴:『世界解放詩集』野間宏編、飯塚書店、5月); 156
	S.28	高村光太郎『ヴェルハアラン詩集』(創元社、12月); 16以降の高村訳を収録
202	S.28	「パン焼」(同上書、初出か? 不明; Cuisson du Pain, in <i>Fl.</i>)
203	S.28	「燃える娘」(同上書、初出か? 不明; La Filles ardente, in <i>B.M.</i>)
204	S.28	「農家の家」(同上書、初出か? 不明; Cour de Ferme, in <i>Pl.</i>)
205	S.33	「午後の時25, 26, 29」(高村光太郎全集) 筑摩書房、第18巻、9月; <i>H.A.</i> XXV, XXVI, XXIX)

(表3) 日本におけるÉ.Verhaeren関連資料(評伝、研究など)略年表

- ◆原則として初出資料に限り、初出誌不明の場合以外は再録誌・書について追跡はしない。
- ◆部分的に論及されている資料でも、資料的価値が高いと判断されるものは記載する。

I	M.30	無署名(上田敏か?)「瀛西藝録」(『江湖文學』第3号、1月)
II	M.34	上田敏「白耳義文學・補遺」(『文藝論集』春陽堂、12月)
III	M.40	折竹蓼峯「海外騷壇 近代佛蘭西詩界の概観 下」(『帝國文學』第13巻第9号、9月)
IV	M.42	永井荷風「佛國に於ける印象派」(『文章世界』第4巻第3号、3月)
V	M.42	内藤濯「神秘と運命との詩人」(『帝國文學』第15巻第5号、5月)
VI	M.42	松原至文「ベルギー文學」(『文藝百科全書』島村抱月編、隆文館、12月)
VII	M.43	中原青燕「文壇うめ草」(『太陽』第16巻第12号、9月)
VIII	M.44	西宮藤朝「ヴェルハアレンの詩」(『劇と詩』11月)
IX	T.2	幽絃郎「エルアアレン」(『帝國文學』第19巻第4号、4月)
X	T.3	西条八十「エルハアレンが詩の経路」(『未来』第1輯、2月)
XI	T.3	与謝野寛・晶子『巴里より』(金尾文淵堂、5月)
XII	T.3	上田敏「独語と対話・自由詩」(『太陽』第20巻第5号、5月)
XIII	T.4	三富火の鳥(朽葉)「エミール・ヴェルハアレン」(『早稲田文學』4月号)
XIV	T.4	犬塚「最近思潮・ヴェルハアレンの叫び」(『早稲田文學』113号、4月号)

XV	T.4	三富火の鳥「ヱルハアレンの生活頌歌」(『早稲田文學』5月号)
XVI	T.6	ルネ・ギル、川路柳虹訳「象徴主義及象徴詩派」(『伴奏』第2輯新春の巻、1月)
XVII	T.6	川路柳虹「食後の卓」(『伴奏』第2輯新春の巻、1月)
XVIII	T.6	三富火の鳥「ヱルハアレンを思ふ」(『早稲田文學』2月号)
XIX	T.6	ロラン・ド・マレス、柳沢健訳「ヴェルハーレン近く」(『詩人』第2巻第2号、2月)
XX	T.6	山宮允訳「エミール・ヴェルハーレン評伝」(『詩人』第2巻第2号、2月)
XXI	T.6	グールモン、柳沢健訳「エミール・ヴェルハーレン」(『詩人』第2巻第2号、2月)
XXII	T.6	富田碎花「民衆藝術としての詩歌」(『早稲田文學』135号、2月号)
XXIII	T.6	川路柳虹「ヴェルハアレン論」(『文章世界』第12巻第4号、4月)
XXIV	T.6	ルミ・ド・グールモン、川路柳虹訳「エミール・ヴェルハアレン」(『伴奏』第3輯春の巻、4月)
XXV	T.6	川路柳虹「尊きこの世紀の詩人ヴェルハアレンに」(同上誌)
XXVI	T.6	上田敏「現代の藝術」(『實業之日本社』5月)
XXVII	T.7	増田篤夫「新文學の為に」(『新潮』第28巻第5号、5月)
XXVIII	T.8	川路柳虹「ホイットマンと自由詩」(『現代詩歌』5月号)
XXIX	T.9	ルミ・ド・グールモン、柳沢健訳「エミール・ヴェルハーレン」(『現代の詩及詩人』尚文堂)
XXX	T.9	新城和一「訳者の序」(エミール・ヱルハレン詩集『触手ある都会、錯覚の田園』洛陽堂)
XXXI	T.11	矢野峰人「詩界行脚ヱルハアレン」(『詩聖』4月)
XXXII	T.11	尾崎喜八「ヱルハアラン祭」(『日本詩人』第2巻第8号、8月)
XXXIII	T.11	アンドレ・ド・ボンシュヴィユ、尾崎喜八訳「ヱルハアランの回想」(『白樺』第13巻11月)
XXXIV	T.11	ステファン・ツワイグ、前田春声訳「エミール・ヴェルハーレンー彼の一生と其の作品」 (『日本詩人』第2巻、1月、2月、3月、4月、5月、6月、7月、8月、9月、10月、11月、12月)
XXXV	T.12	同上書、同上誌；第3巻、8月、10月、11月
XXXVI	T.15	尾崎喜八「エミール・ヴェルハーレン」(『明星』3月)
XXXVII	S.3	片山敏彦「ヴェルハーラン」(『至上律』第5輯、7月)
XXXVIII	S.3	森脇達夫「ヱルハラン断想」(同上誌)
XXXIX	S.3	谷内一郎「感想断片」(同上誌)
XL	S.3	真壁 仁「詩父ヱルハアラン」(同上誌)
XLI	S.3	渡辺 茂「吾等がヴェルハーラン」(同上誌)
XLII	S.3	伊藤 整「風ーヴェルハアランに捧げる」(同上誌)
XLIII	S.8	高村光太郎「ヴェルハアラン」(『岩波講座世界文学近代作家論』、岩波書店)
XLIV	S.10	西条八十「ヴェルハーラン」(『世界文学大辞典』第1巻、吉江喬松編、中央公論社、10月)
XLV	S.10	川路柳虹「自由詩の可能と誤謬」(『詩学』耕進社)
XLVI	S.25	内藤濯「ヴェラーラン」(『フランス文学辞典』全国書房、12月)
XLVII	S.27	波多野茂樹「ヴェルハーレンとロマン・ロランの手紙」(『ロマン・ロラン研究』通号4、6月)
XLVIII	S.29	北川冬彦「高村光太郎とヴェルハアラン」(『時間』7月)
XLIX	S.32	吉本隆明「高村光太郎」(飯塚書店)
L	S.39	森 乾「ヴェルハーレンと日本人」(『本の手帖』10月)
LI	S.41	阪本越郎「高村光太郎とエミール・ヴェルハアレンーその相似の人生行路について」(『万緑』2月)
LII	S.41	伊藤信吉「高村光太郎研究」(思潮社、8月)
LIII	S.47	安川定男「高村光太郎とヴェルハーラン」(吉田精一編『高村光太郎の人間と芸術』教育出版センター、6月)
LIV	S.49	渡部 一民「ヴェラーレン」(『フランス文学辞典』白水社、9月)
LV	S.49	平川祐弘「高村光太郎における訳詩と創作詩」(『講座比較文学4 近代日本の思想と芸術II』東京大学出版会)
LVI	S.50	島田謹二「上田柳村の『海潮音』」(『日本における外国文学』上巻、朝日新聞社、12月)
LVII	S.51	嶋岡晨「高村光太郎」(レグス文庫60、第三文明社)
LVIII	S.53	窪田般弥「日本近代文学とヴェルハーレン」(『日本近代文学大事典』第4巻、講談社、1月)
LIX	S.53	檀上文雄「エミール・ヴェルハーレンの現代意識」(『鈴峯女子短期大学人文社会科学研究集』第25集、12月)
LX	S.57	大場恒明「高村光太郎とエミール・ヴェルハーレン」(『日本女子大学紀要文学部』第31号、3月)
LXI	S.60	佐藤伸宏「三富朽葉とエミール・ヴェルハーレン」(『日本文学ノート』第20号)
LXII	S.60	佐藤伸宏「日本に於けるエミール・ヴェルハーレンー明治・大正期を中心にー上ー」 (『宮城学院女子大学研究論文集』通号62)
LXIII	S.61	佐藤伸宏「日本に於けるエミール・ヴェルハーレンー明治・大正期を中心にー中ー(1)」 (『宮城学院女子大学研究論文集』通号64)

LXIV	S.63	大場恒明「訳詩家としての高村光太郎—エミール・ヴェルハーレン詩篇をめぐって」 (「日本女子大学紀要文学部」第37号、3月)
LXV	H.11	大場恒明「エミール・ヴェルハーレンのImages Japonaises をめぐって」 (「国際経営論集」第16.17合併号、神奈川大学経営学部、3月)
LXVI	H.12	大場恒明「エミール・ヴェルハーレンと上田敏」(「麒麟」第9号、神奈川大学経営学部17世紀研究会、3月)
LXVII	H.12	湯原かの子「高村光太郎とエミール・ヴェルハーレン—自然観をめぐって」 (「上智大学仏語・仏文学論集」通号35)
LXVIII	H.13	村松定史「異文化交流のひとつ—ヴェルハーレンと縮緬本」(「研究紀要」(8)、東京成徳大学)
LXIX	H.13	大場恒明「明治期におけるエミール・ヴェルハーレン移入」(「麒麟」第10号、3月)
LXX	H.14	大場恒明「大正期におけるエミール・ヴェルハーレン移入 (1)」(「麒麟」第11号)
LXXI	H.15	大場恒明「大正期におけるエミール・ヴェルハーレン移入 (2)」(「麒麟」第12号)

<注>

- (1) 資料の参照は表2のものは算用数字で表3のものはローマ数字で、文中、括弧に入れて示す。
- (2) Frederic A. Sharf : *Takejiro Hasegawa : Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books* (Peabody Essex Museum Collections, Volume 130, Number 4, October 1994, issued quarterly by the Peabody Essex Museum)
- (3) Jean-Marie Culot : *Bibliographie de Émile Verhaeren*; Académie Royale de Langue et de Littérature Française de Belgique; Palais des Académies, 1954)
- (4) ADAM, No.250, p.xvi
- (5) Osman Edwards : *Émile Verhaeren (The Savoy, No.7, November 1896, pp.65-76)*
- (6) Osaman Edwards : *Japanese Plays and Playfellows* (London, William Heinemann)
- (7) Virginia M. Crawford : *Émile Verhaeren : the Belgian Poet (The Fortnightly Review, November 1896, pp.715-726)*
- (8) Henri Morier : *Le rythme du vers libre symboliste, étudié chez Verhaeren, Henri de Régnier, Vielé-Griffin et ses relations avec le sens, I, Les Presses Académiques, Genève, 1943, pp.244-245)*
- (9) 中村星湖「おぼえ書き」(『三富義臣君、今井国三君、追悼録』大正6年、三富、今井追悼録事務所、28頁)
- (10) André Beaunier : *Le vers libre (Mercure de France, III-1901, pp.613-633)*
- (11) 人見東明「明治詩壇の一角—「自然と印象」の復刻について」(『三富朽葉全集』第3巻(下)、牧神社、1978、13頁)

- (12) 『三富朽葉全集』第2巻, 「遺稿雜纂」, 牧神社, 1978, 234頁
- (13) 前掲書, 366頁
- (14) 前掲書, 65頁
- (15) 小論「金子光晴とブリュッセルを歩く」(「麒麟」第13号, 神奈川大学経営学部十七世紀文学研究会, 2004) 参照
- (16) 金子光晴「高村光太郎訳『天上の炎』解説」(『金子光晴全集』第15巻, 中央公論社, 昭和51年, 384頁)
- (17) 矢野峰人「『日本現代詩大系』第5巻, 解説」(河出書房, 昭和26年, 387頁)
- (18) 『高村光太郎全集』第18巻(筑摩書房, 昭和32年, 288頁)
- (19) 宗左近「高村さんの翻訳」(草野心平編『高村光太郎研究』筑摩書房, 昭和34年, 252頁)
- (20) Émile Verhaeren: *Les Villages illusoires*, in *Œuvres I-III* (Genève, Slatkine Reprints, 1977, pp.265-266) / 『高村光太郎全集』第18巻, 283頁
- (21) 『高村光太郎全集』第1巻, 175-178頁
- (22) 前掲書, 190-193頁
- (23) 前掲書, 221-230頁
- (24) 高村光太郎「気について」(『高村光太郎全集』第8巻, 77頁)
- (25) 高村光太郎「新緑の毒素」(「白樺」明治44年7月号)
- (26) 嶋岡晨『高村光太郎』(レグルス文庫60, 第三文明社, 1976, 8頁)
- (27) 高村光太郎「七月の言葉」(『高村光太郎全集』第9巻, 345頁)
- (28) 『高村光太郎全集』第1巻, 355頁, 第2巻, 165頁, 326頁